１９８７年度

交野市埋蔵文化財発掘調査概要

１９８８．３

交野市教育委員会

例　言

1．本書は、交野市教育委員会が、昭和62年度国庫補助事業（総額2,000,000円、国庫補助50％、府補助25％、市負担25％）として実施した交野市内における埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は、交野市教育委員会が実施し、社会教育課の奥野和夫、山口博志が担当した。尚、神宮寺遺跡の発掘調査に際しては、奈良大学の泉拓良助教授に御助言、御教示をいただいた。

3．本書の作成にあたって、神宮寺遺跡については奈良大学助教授泉拓良氏に、森遺跡については大阪府文化財保護課技師・松岡吉憲氏に御教示をいただいた。又遺物の整理・実測については、大中寿之・真鍋成史両君の協力を得た。

4．調査の実施に際しては、三原敬二郎、大中寿之、北村尚博、小川暢子、星野義雄、田中啓文、田中義敏、竹内毅、森井直也、黒田和夫、船吉仙旬、嶋澤泰彦、諸氏の参加を得た。

はしがき

この書は、昭和62年度の国庫補助事業として実施いたしました交野市内の埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

本年度につきましては、主に神宮寺遺跡と森遺跡の発掘調査を実施いたしました。

この調査により、遺跡の範囲、存在期間等、その遺跡の性格の一端を垣間見ることができた思いがいたします。

調査に際しまして、御指導を頂いた奈良大学助教授・泉拓良氏及び大阪府文化財保護課技師・松岡良憲氏をはじめ調査地の申請者の方々の御協力に深く感謝の意を表するしだいであります。

尚、交野市内には、開発に際し発掘調査を必要とする埋蔵文化財の包蔵地が、数多く存在しています。

このように、私達の先祖が残した重要な文化遺産を後世に伝え残すことは、現代に生きる私達の責務であると考えます。

つきましては、今後の発掘調査、遺跡の保全に皆様方のより一層の御理解、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

交野市教育長　伊　藤　史　朗

交野市の位置図

目　次

はじめに

例　言

第１章　1987年度埋蔵文化財発掘調査概要……１

第２章　神宮寺遺跡調査報告……３

(1)　位　置……４

(2)　層　序……５

(3)　遺　構……８

(4)　遺　物……８

(5)　まとめ……12

第３章　森遺跡調査報告……13

第１節　調査区―②……14

(1)　位　置……14

(2)　層　序……14

(3)　遺　構……15

(4)　遺　物……15

(5)　まとめ……16

第２節　調査区―③……17

(1)　位　置……17

(2)　層　序……17

(3)　遺　構……18

(4)　遺　物……19

(5)　まとめ……19

第１章　1987年度交野市内遺跡群発掘調査概要

昭和62年度、交野市内において382件の建築確認申請があった。このうち、周知の「埋蔵文化財包蔵地」に関わる９件については、文化財保護法第57条２及び３による発掘届出を行い、その内７件について試掘及び調査等を実施した。

また、周知の「埋蔵文化財包蔵地」以外の地域についても遺跡の存在の可能性のある７件については、試掘及び立会調査を実施した。

本年度、交野市教育委員会が、国庫補助事業にて実施した調査については、以下の一覧表のとおりである。

1987年度発掘調査一覧表

調査区	遺跡名	申請者	所在地	面積(㎡)	備考
1	神宮寺	冨田英夫	交野市神宮寺 ２丁目102	657.00	本書３ページ
2	森	山野瑞枝 山野朋子	交野市森南 1丁目413-1	668.38	本書13ページ
3	森	山添　進	交野市森南 １丁目50-5	557.18	本書17ページ
4	京ノ山古墳	北村俊男	交野市寺 1丁目839	188.71	2.0×2.0mのトレンチと3.0×1.5mのトレンチを設定。遺物・遺構なし。地表下160cmまで掘り下げたが、隣接河川による砂層の推積のため地山は確認できず。
5	交野郡衙跡	山口　功	交野市郡津 ２丁目1482	1177.20	2.0×2.0mのトレンチを設定。 遺物・遺構なし。 地表下20～30cmで地山。
6	私部城跡	村尾　緑	交野市私部 ４丁目1681	344.03	3.0×3.5mのトレンチを設定。 遺物・遺構なし。 地表下約50cmで地山。
7	森	仲西正三	交野市森南 ２丁目24-2	237.92	1.0×1.0mのトレンチを設定。 遺物・遺構なし。 地表下70～80cmで地山。

第１図　1987年度交野市内発掘調査位置図　　１：20,000

第2章　神宮寺遺跡調査報告

神宮寺遺跡

神宮寺遺跡は交野市東部、生駒山系の西側山麓部に面した扇状地内に立地し、現在では大部分が果樹園となっている。

当遺跡内からは、旧石器時代に属すると考えられるサヌカイト製の石器や神宮寺式土器と呼ばれる押型文を特徴とする、縄文時代早期の土器が出土している。

歴史時代に入っては、市内では最古の寺のひとつで奈良時代の創建とされる開元寺が存在していたことが記録（興福寺文書）に残っている。

遺跡については、昭和32年に故片山長三氏に発見されて以来、同年から35年までの4回と、48年にも発掘調査が実施されている。この調査の結果、当遺跡は、旧石器時代から近世に至るまでの複合遺跡であることが確認されている。

第2図　調査地位置図　　1：2500

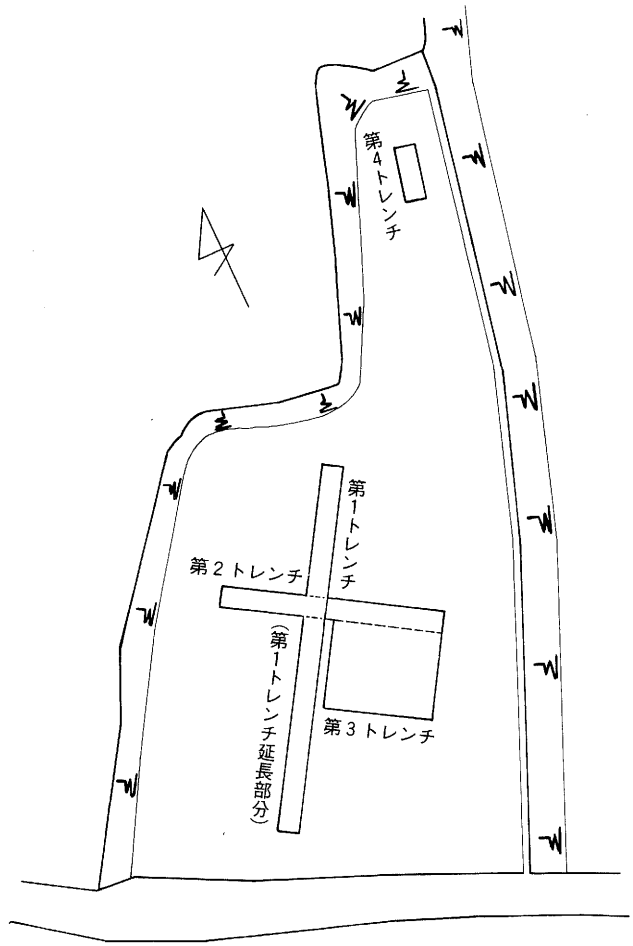
(1) 位　　置

今回の調査地は、神宮寺の集落より東の方向に登山道を70m程登った交野市神宮寺1丁目102番地内で、昭和32年当時の調査地とは、登山道を狭んで30m程離れた北側に位置する。標高は71.3mである。

調査は、まず南北に7m×1.2mの第1トレンチと、このトレンチにT字形に接する形で、東西に12m×1.2mの第2トレンチを設定した。

次にこの両トレンチの調査結果から、最も遺跡等が存在する可能性があると考えられる第2トレンチの東側部分6mを南側に6m拡大し、第3トレンチとした。

最後に、縄文遺物包含層の範囲確認のために第1トレンチをさらに南側へ14m延長するとともに調査地北端にも、3m×1.2mのトレンチを設定した。



第3図　調査位置図　　1：400

(2) 層　　序

第１トレンチ（第４図・第５図）では、地表下約80cmまで旧耕作土層（第２～５層）が整然と堆積する。旧耕作土層の最下層部に鉄分を多量に含む暗褐色砂質土（第５層）が存在し、その下層部は、大小の岩石を多量に含む淡褐色礫混り砂質土（第６層)となる。

出土遺物から中世以降の土石流による攪乱層と推定できる。

縄文土器を含む包含層である暗灰黒色砂質土（第８層）は、この下層部に存在し、上面は北端で地表下1.20m、南端で1.10m を測り、最深部は第１トレンチ(第４図) 北端より４m 先で2.18m を測る。

同包含層は、両トレンチの交差部分では比較的安定して存在するが、両端に向かうにつれて不安定となり北側部分では、トレンチ北端付近にて消失するが、南側部分では、トレンチ南端より6.8 m の地点付近から上層の攪乱が部分的にみられるものの(第５図の中央部分) 南端まで存在する。(当初、東側断面図を記録する予定で、トレンチの片側部分を暗灰黒色砂質土層の下部まで掘り下げたが、断面の崩壊にて、 西側部分の暗灰黒色砂質土層の上面までの断面を記録した。)

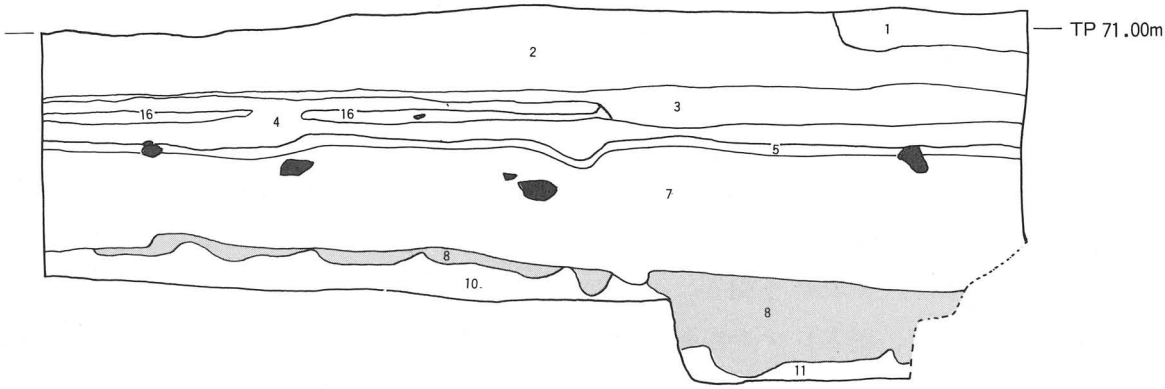
第２トレンチについては、縄文包含層より上層については、第１トレンチとほぼ同様に堆積する。同トレンチにおける暗灰黒色砂質土層は、地形に応じた形で東から西に傾斜しており、その上面は東端で地表下で0.85m、西端で1.78m を測り、その最深部は、それぞれ地表下1.30m、1.86m を測る。

暗灰黒色砂質土層より下層では、砂粒の大きさに変化はみられないが、色調において徐々に黒味が薄くなり、以下第９層から第10層まで連続的な変化がみられる。遺物は含まれていなかった。

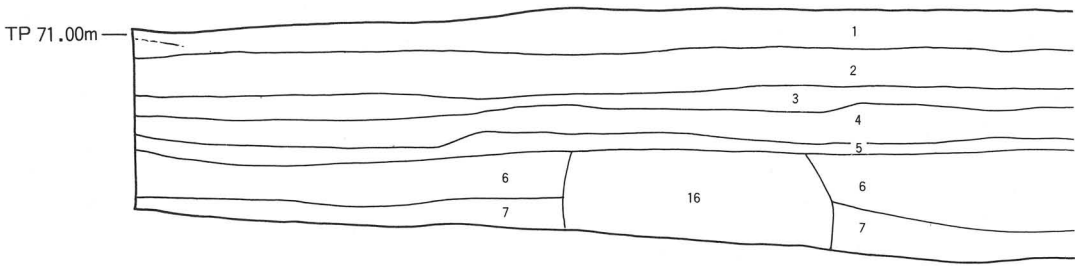
第３トレンチの中央部（第７図Ⅱ）にて、部分的に地表下３m まで掘り下げたが淡青灰色礫混り砂質土（第12層)、淡茶褐色礫混り砂質土（第13層)、黄褐色礫混り砂質土（第14層）と続き、地表下約2.40mから黄灰色砂質土層（第15層）が続いていた。この層からはじめて、湧水があった。

この層序から、同調査地点の縄文ベース面は、東から西、北から南へ傾斜した地形上に存在していたことが推定できる。又、第４トレンチでは地表下1.80m まで掘り下げたが、包含層は存在しなかった。

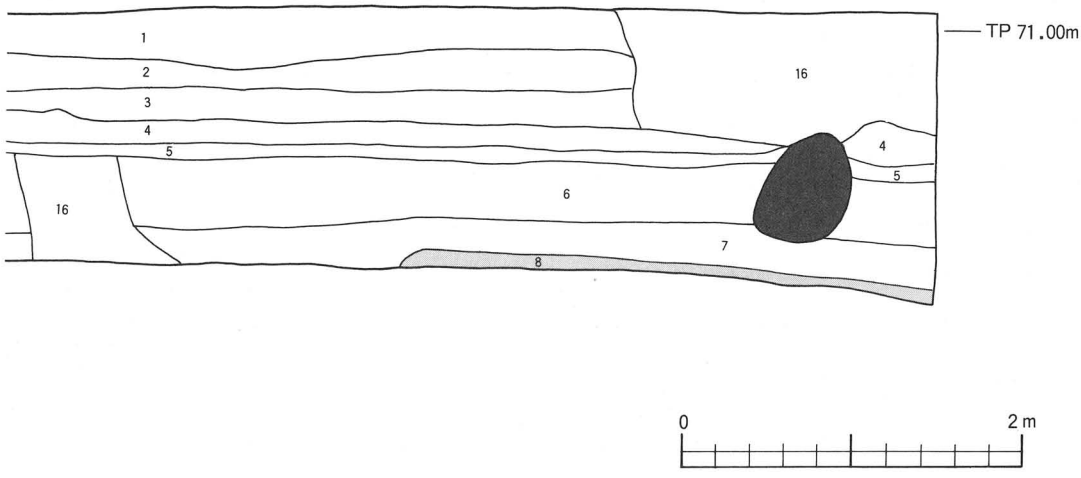
以上のことから、同調査地の層序は基本的には (1) 縄文層である花崗岩質砂質土をベースにした層 (2) 土石流によるものと推定される礫混りの褐色系の砂質土層 (3) 耕作土である客土と見られる層の三層から成立していることがいえる。

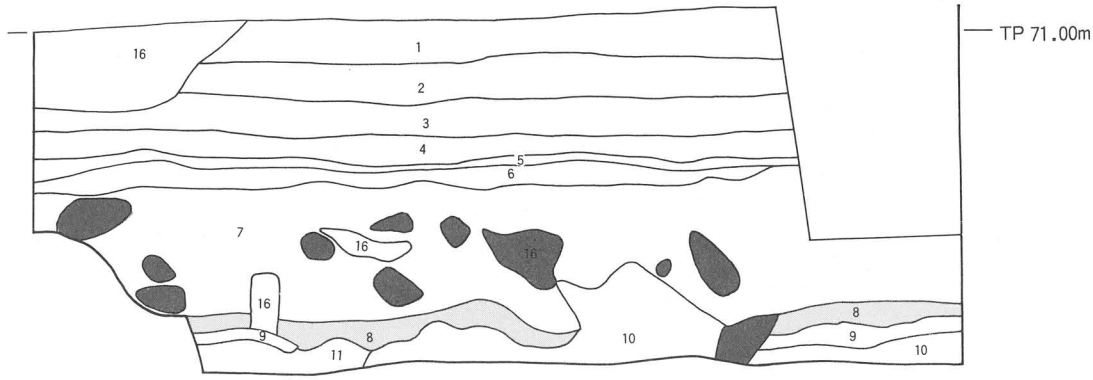


第4図　第1トレンチ東側断面図

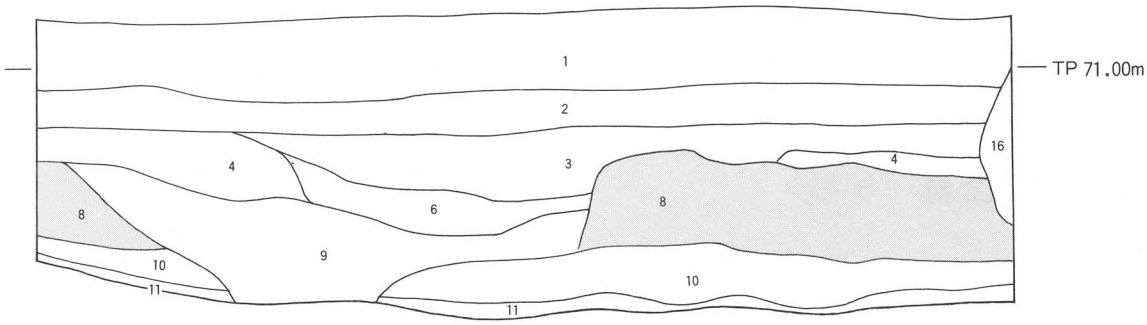


第5図　第1トレンチ西側断面図

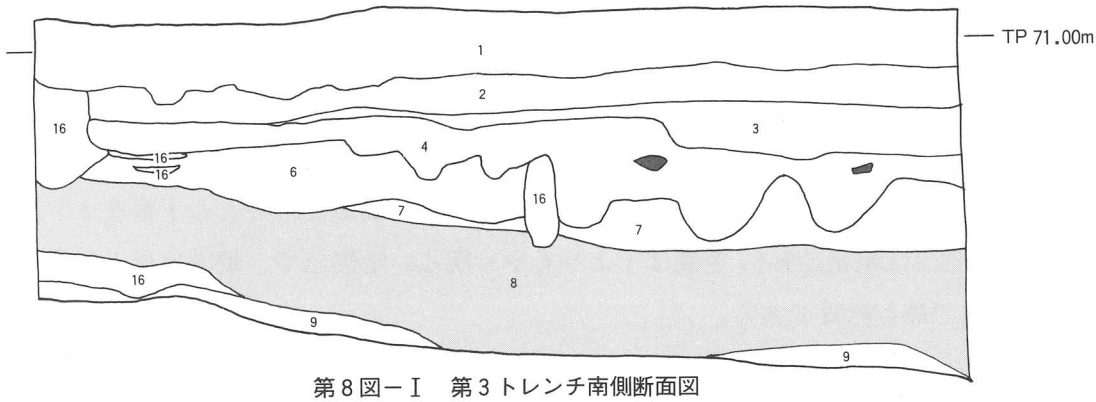




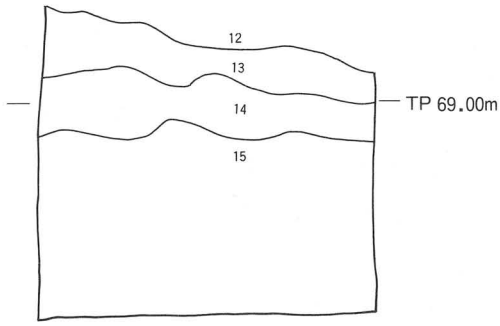
第６図　第２トレンチ北側断面図



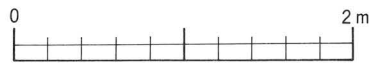
第７図－Ⅰ　第３トレンチ東側断面図



第８図－Ⅰ　第３トレンチ南側断面図



第７図－Ⅱ



1．盛　　土
2．旧耕作土
3．淡黄褐色礫混り砂質土
4．淡灰色礫混り砂質土
5．暗褐色砂質土（鉄分混り）
6．淡褐色礫混り砂質土
7．淡黄褐色礫混り砂質土
8．暗灰黒色砂質土
縄文遺物包含層

9．暗灰褐色砂質土
10．淡灰黄褐茶色砂質土
11．黄灰色砂質土
12．淡青灰色礫混り砂質土
13．淡茶褐色礫混り砂質土
14．黄褐色礫混り砂質土
15．黄灰色砂質土
16．攪　乱
岩　石

(3) 遺　構

今回の調査では、遺構についての確認はできなかった。この点について、今回の調査で出土した縄文土器の内、前述の土石流による攪乱層より出土した１点を除いた全ての土器が暗灰黒色土層の上面より出土していることから、本来の遺構面は、この土石流によると考えられる攪乱層によって削り取られたものと推察される。

(4) 遺　物

出土遺物については、縄文土器の他、須恵器、土師器、瓦器等が出土したが、これまでの調査と比較して縄文土器の出土数が、わずか10点余りと非常に少なく、また石器については全く検出されなかった。

縄文土器（早期）

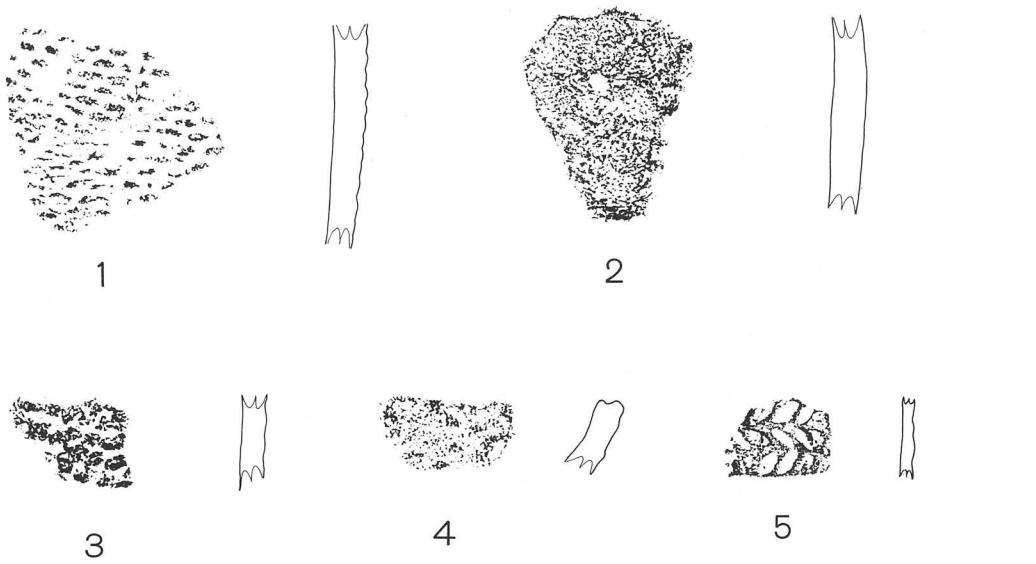
１はポジティブな楕円押型文土器で、第２トレンチ西側部分、縄文遺物包含層より上層の第７層の上部より出土する。器壁は6.5～9.5mmを測り、これまでの神宮寺式土器と比較して厚手であり、従来とは異ったタイプの土器である。文様は長楕円形で横位に密接して施文されており、内面は丁寧なナデ調整を施す。胎土は２～３mmの砂粒を含む。色調は暗褐色を呈し、焼成は軟質である。

2.は無文土器である。第２トレンチ東側部分の縄文包含層上面より出土する。器壁は、１と比較すると薄いが、やや厚手の方である。器面は内外とも丁寧なナデ調整を施す。胎土は精良である。色調は１よりもやや明るい暗褐色で、焼成は出土した縄文土器の内で最も軟質である。

3.は、ポジティブな押型文土器で、第３トレンチ第８層より出土する。文様は摩耗が激しく不鮮明であるが、楕円形を呈す。器壁は、6.3～7.0mmを測る。胎土は２～３mmの砂粒を含む。色調は外面では淡赤褐色であるが、内面は淡褐色であり、焼成は軟質である。

4.はポジティブの楕円押型文である。第３トレンチ西側の第８層より出土する。器壁は、７mmを測る。疑口縁を有し、胴の膨む部分である。胎土は１～２mmの砂粒を含む。色調は、内外面とも淡黄褐色で焼成は軟質である。

5はネガティブの押型文である。第1トレンチ南側部分第8層上部より出土する。文様は「ハ」字状を呈し、いわゆる舟形沈文である。器壁は3.5～5.0㎜を測る。胎土は精良である。内面は、ナデ調整であるが前二者とは異なる。色調は淡暗褐色で、焼成は出土した土器の中では最も硬質である。



第9図　遺物実測図

その他の土器

1.は、東播系須恵器片で鉢の口縁部である。端部は肥厚し上向きの面を持ち、黒く発色している。内外面共にヨコナデ調整をする。胎土は２～３mmの砂粒を含み、色調は青灰色で、焼成は硬質である。

２～３は土師質の土釜片である。

2.については、復元口径は約32cmを測る。つばは、下方向に付く。内外面ともにヨコナデ調整を行う。胎土は粗雑で５mmほどの砂粒を含み、色調は赤褐色で、焼成は軟質である。

３については、復元口径は約13cmを測る。鍔の方向及び調整については２と同様である。胎土は２mm程度の砂粒を含み、色調は淡赤褐色で焼成は軟質である。共に14世紀頃のものと推定される。

４・５・６は土師器片の皿である。

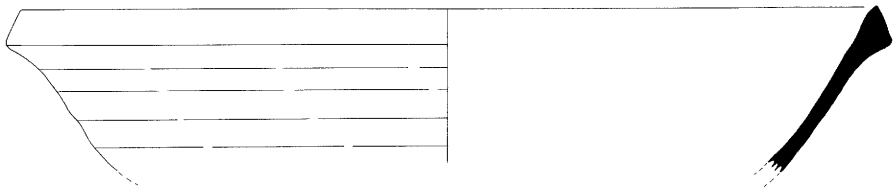
４は、内面が横ナデ調整、外面が口縁部でヨコナデ調整、底部で斜方向ナデ調整、また指頭圧痕が認められる。胎土は精良である。色調は、淡灰色である。焼成は軟質である。

５は、内面が口縁部で横ナデ調整、底部で多方向ナデ調整、外面が口縁部で横ナデ調整、底部で多方向ナデ調整を行う。胎土は精良である。色調は淡赤褐色である。焼成は軟質である。

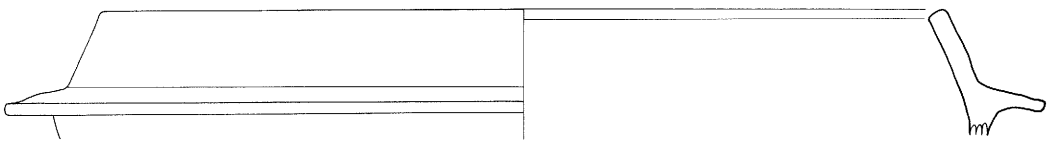
６は、内面が横ナデ調整、底部で斜方向ナデ調整を行う。胎土は精良である。色調は、暗灰色である。焼成は軟質である。

７は、瓦器片の椀である。内面は横ナデ調整を施し、さらに、ミガキを施す、体部にハケ目の痕跡が認められる。外面は口縁部で横ナデ調整、体部に指頭圧痕が認められる。胎土は精良である。色調は暗灰色である。焼成は軟質である。

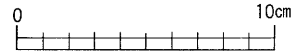
これらの皿については、細片であるため時期についての詳細は不明であるが、土師釜と同時期のものであると推定される。

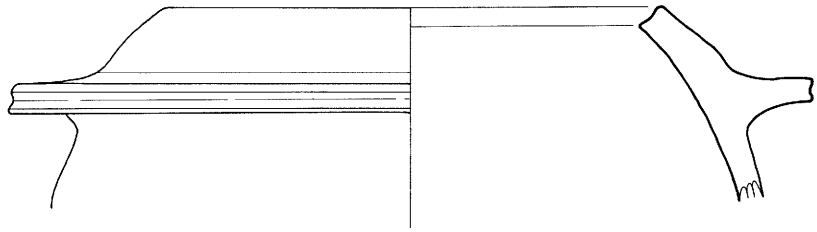


1

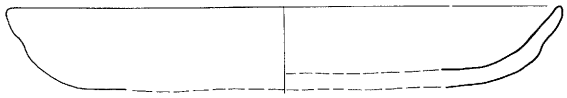


2



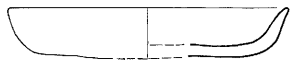


3

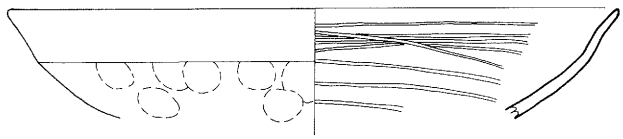


4

6

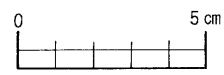


5



7

第10図　遺物実測図



ま と め

今回調査の結果を、これまでの調査と踏まえて考察してみると次のことが考えられる。

(1) 遺物の出土数が、前回までの調査の例と比較して極端に少ないこと、包含層である暗灰黒色砂質土層が調査区北端に向かうにつれて消滅することなどから、いわゆる神宮寺式土器の分布する範囲の北限を今回の調査で明らかにすることが出来た。縄文遺跡は、昭和32年と昭和48年の調査地を結ぶ線上で扇状地のほぼ中央部分に、存在していたと推察される。

(2) 出土した縄文式土器片の内三点は（第９図１・３・４）は神宮寺式土器と違って厚手の土器であった。泉助教授の教示によると、この土器は神宮寺式土器とは時期が異り、岡山県の黄島貝塚・滋賀県の葛籠尾崎（つづらおざき）湖底遺跡から出土した土器に相当するものとのことであった。

この点については、昭和32年に「交野考古学会」によって発行された神宮寺遺跡発掘報告書にも「他の土器と比較して相当厚手で斜の平行沈線を一面に施し、線の方向は羽状となったり交叉したりする土器片が出土した」とある。この土器を 故 片山長三氏は、三戸式と位置づけておられるが、土器の図が記載されていないので、どの土器を示しているのかは定かではない。これらの土器の出土から、神宮寺遺跡は地点を変えながらも相当の間存続していたことが推察される。

(3) 縄文時代以前については、石器類等を検出出来なかったので、考察は差しひかえるが、以降については、中世の土師釜及び土師皿等及び一部の須恵器片から推察して、文献にある８世紀に創立され、その後鎌倉時代になって交野山々頂へ寺を移し、室町時代まで（昭和29年の発掘調査より）続いたとされる開元寺及び岩倉開元寺と何らかの関係した建物が存在していたと推察される。

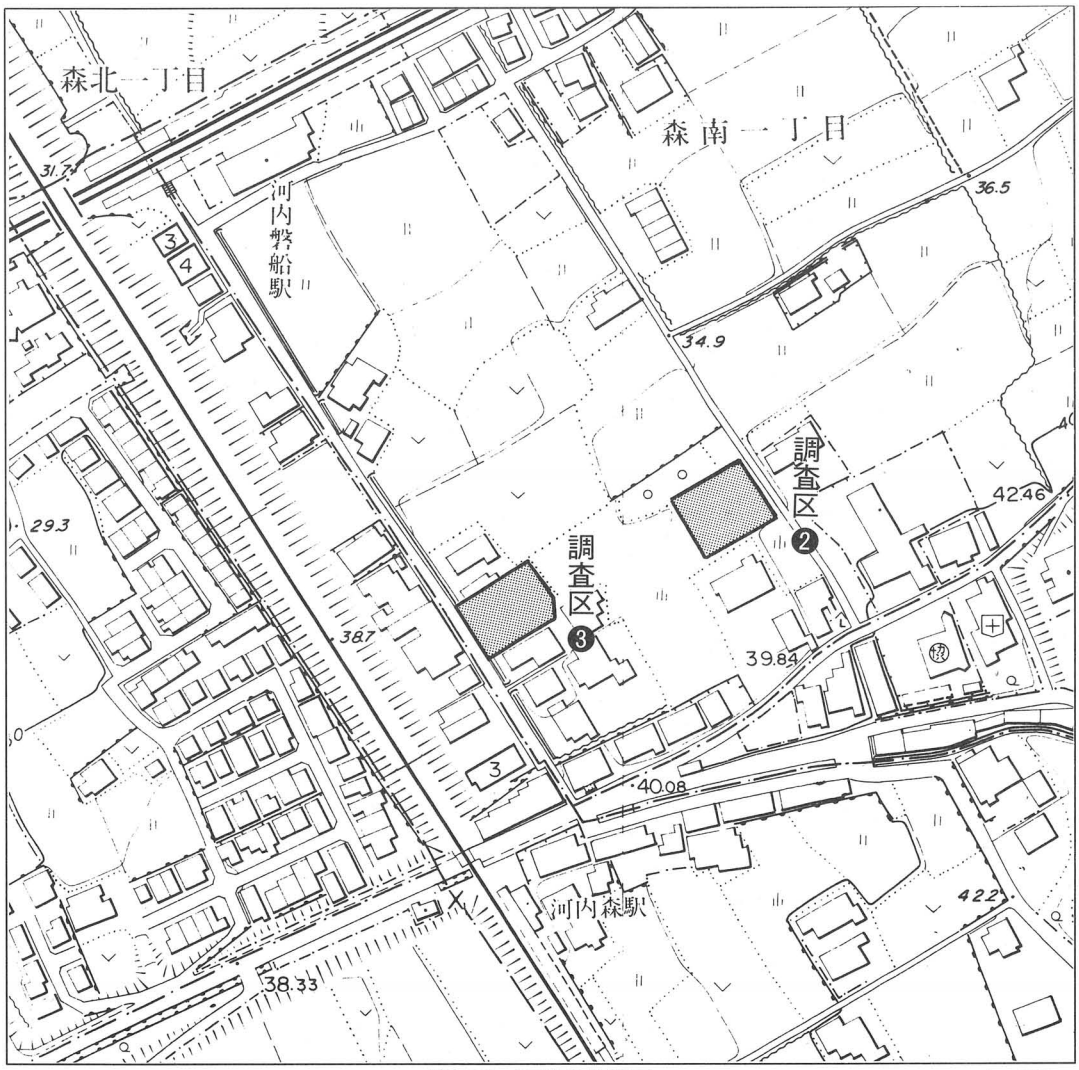
以上３つの点について、考察を行ったが、当遺跡及びその付近には、縄文中期及び弥生後期から現代に至るまでの遺跡が存在しており、今後の調査が期待される。

第３章　森遺跡調査報告

森　遺　跡

森遺跡は、交野市森南のＪＲ片町線・河内磐船駅より山手付近一帯に所在する弥生時代から現代にかけて営まれた集落遺跡と推定される。

この遺跡に隣接した山地部には、高地性集落である南山遺跡や府下でも最古級の前方後円墳と考えられている、雷塚を含む森古墳群が、当遺跡を見落ろすような位置に所在し、また平野部には中期古墳群である車塚古墳群が北側に隣接して所在する。

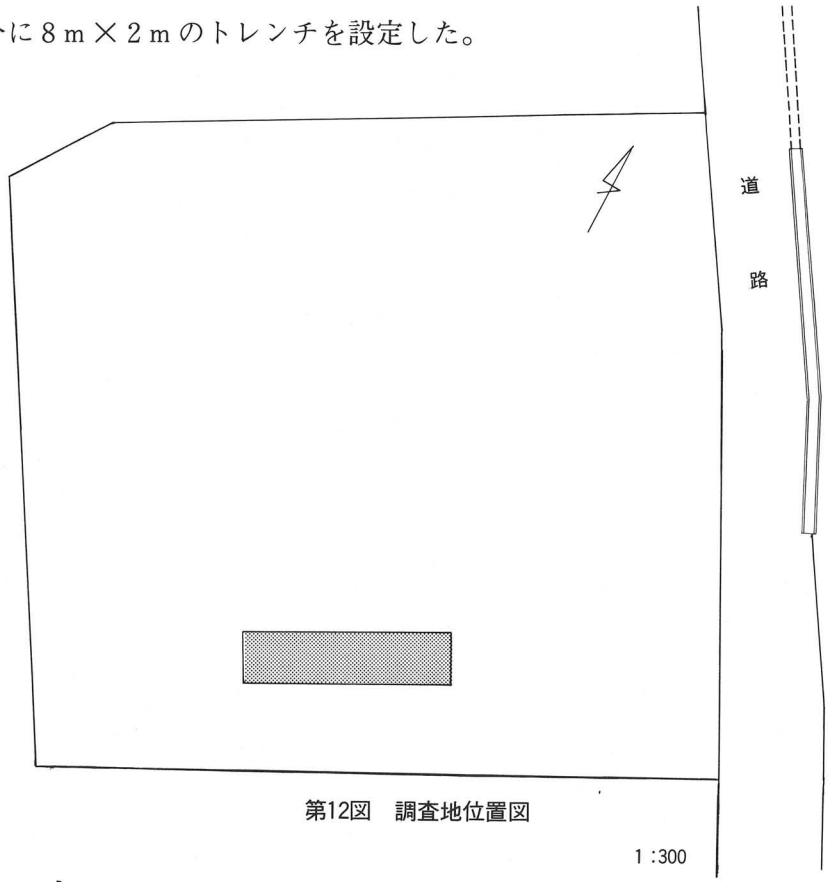


第11図　調査地位置図　　1：2500

第１節　調査区—②

(1) 位　置

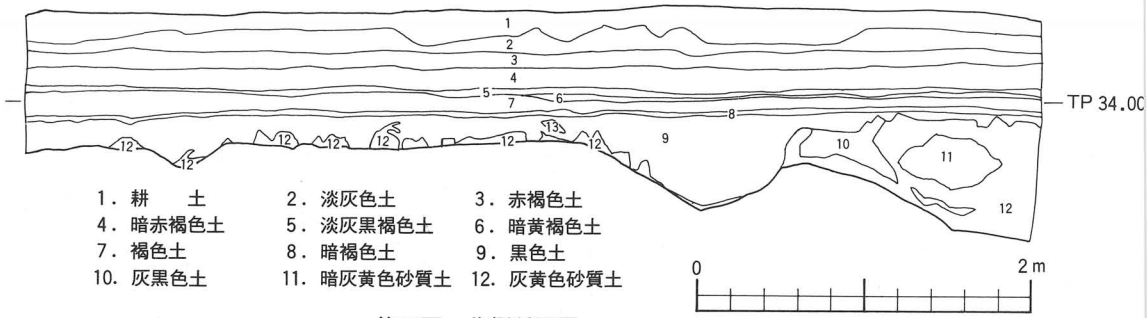
本調査地は森遺跡内のＪＲ片町線河内磐船駅より 200ｍ程南の交野市森南１丁目413番地ノ１内に位置する。調査地の現況は田で標高は38.5m である。発掘調査は調査地南側部分に８ｍ×２ｍのトレンチを設定した。



第12図　調査地位置図

(2) 層　序

地表下約80cmの第８層目の暗褐色土層までは、耕作土が整然と堆積する。第８層より下層の第９層には、湿地であったと思われる粘質の黒色土層があり、その最深部は溝状部分の最下部で地表下約 1.5ｍを測る。地山は第12層の灰黄色砂質土である。



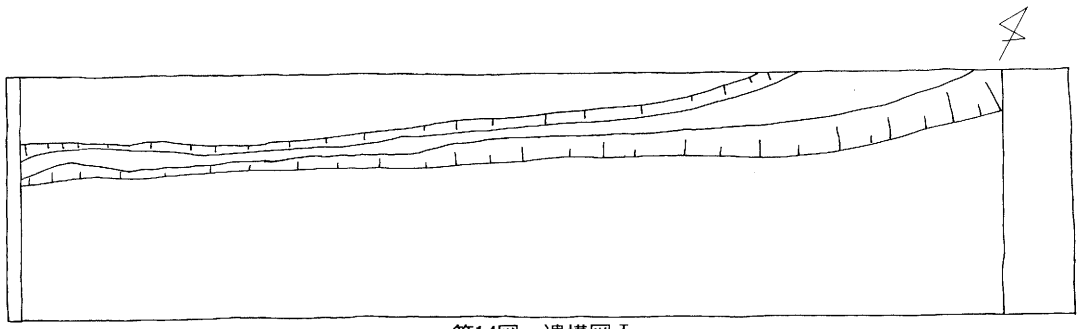
1．耕　　土　　2．淡灰色土　　3．赤褐色土
4．暗赤褐色土　　5．淡灰黒褐色土　　6．暗黄褐色土
7．褐色土　　8．暗褐色土　　9．黒色土
10．灰黒色土　　11．暗灰黄色砂質土　　12．灰黄色砂質土

第13図　北側断面図

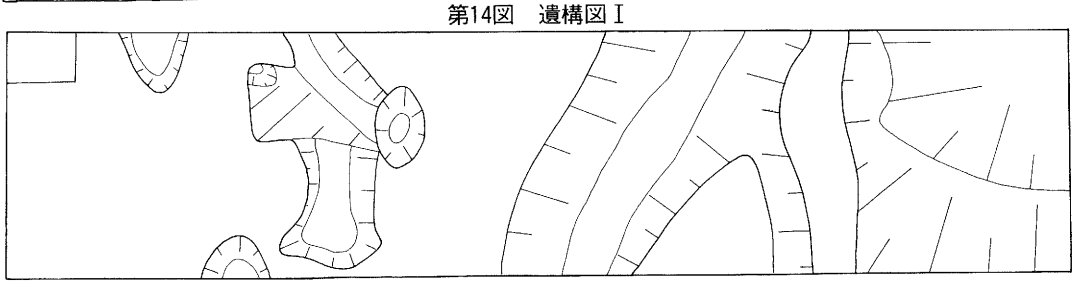
(3) 遺　構

暗褐色土層（第８層）の下層面に（第14図Ⅰ）鋤(すき)溝と思われる耕作面の跡を検出した。またその下層の黒色土層下で溝１本（第14図Ⅱ）を検出した。溝は幅約1～～1.4m、深さ約50cmを測りほぼ南北にのびる。

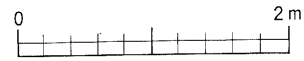
遺物は、表土より第８層まで須恵器、土師器及び瓦器片が混在するが、次の灰黒色土層及び黒色土層からの遺物は、ほとんど見られなかった。尚、黒色土層の上面より瓦器片を検出した。



第14図　遺構図Ⅰ



第14図　遺構図Ⅱ

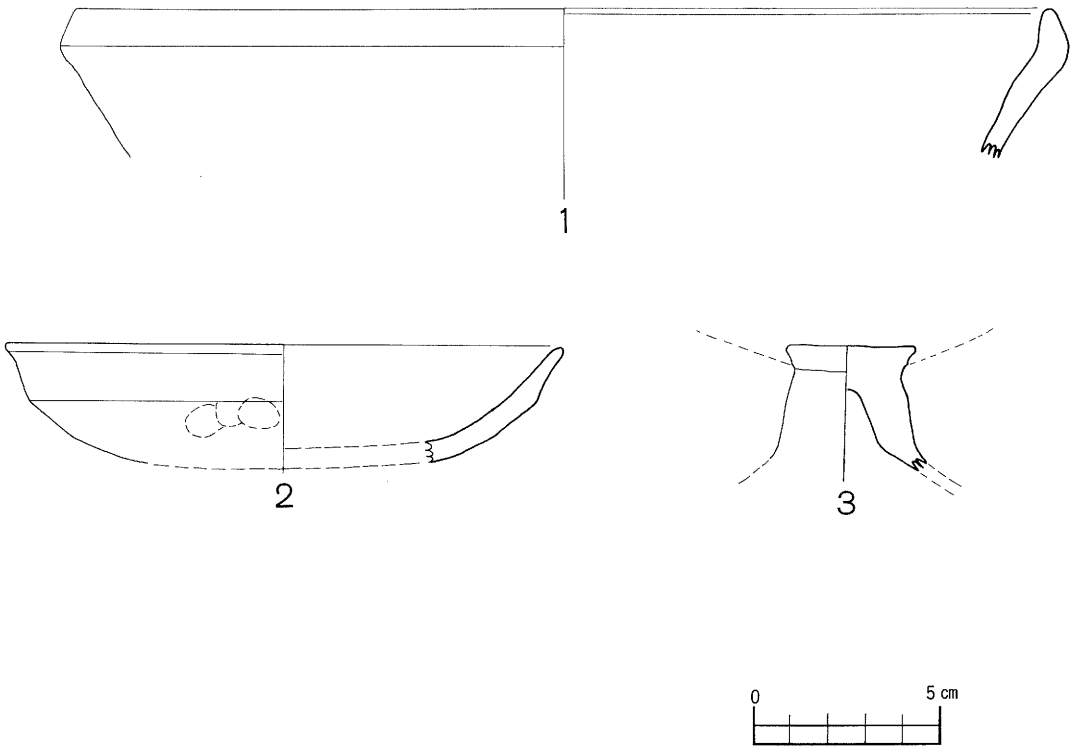


(4) 遺　物

１は瓦質の鉢の口縁部である。端部は内傾する面を持つ。内外面共にヨコナデで調整する。胎土は２～３㎜の砂粒を含み、色調は淡灰色で焼成は、硬質である。外面口縁部分に炭素が吸着し暗青灰色を呈す。

２は、土師器片の皿である。内面全体及び外面の口縁端部は丁寧なヨコナデ調整を行い、外面の体部中位以下に指頭圧痕を残す。

３は、高杯の脚部片である。胎土は２㎜程度の砂粒を多量に含み、色調は、やや赤みがかった淡茶色で、焼成はやや軟質である。



第15図　遺物実測図

(5) ま と め

調査地は、表土より各時代の遺物が混入していた。

最下層の耕作面（第８層）より検出した瓦器片により、同層以上の耕地化は鎌倉時代以降と推定される。

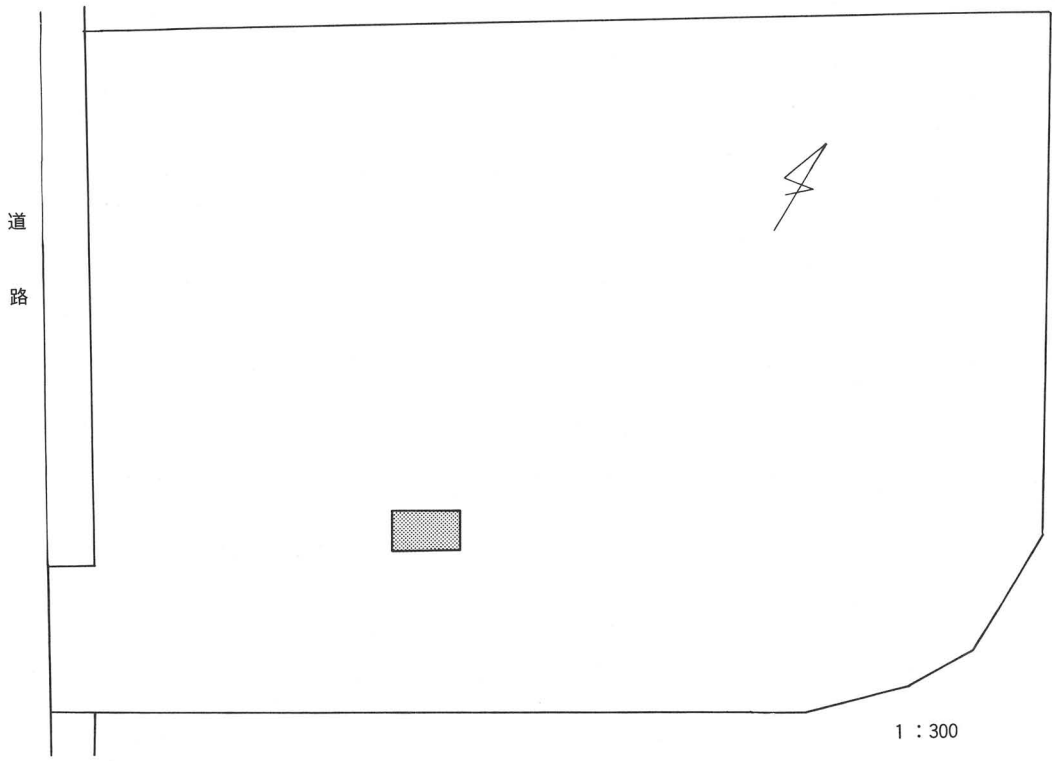
同層より下層の黒色土層が耕作面であったか否かについての問題は残るが、同地域が条里制の一部であると推定されていることもあり、今後の調査が期待される。

黒色土層の下部より検出した溝については、遺物を全く伴わなかったことから、人為的なものではない可能性も十分考えられる。

第２節　調査区―③

(1)　位　置

本調査地は、京阪電鉄河内森駅からＪＲ片町線の河内磐船駅へ向かう坂道を60m 程度降った道路の右側の地点で、②の調査区より西へ90m 程離れた、森遺跡の西端部で交野市森南１丁目50-５番地内に位置する、標高35.8m の地点である。発掘調査は、屋敷内の通路部分に1.2m ×2m のトレンチを設定した。

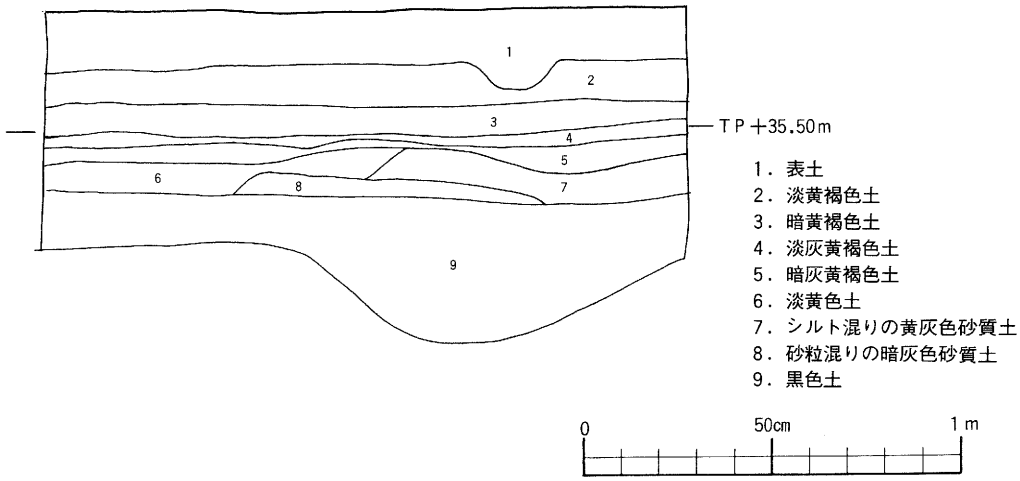


第16図　調査地位置図

(2)　層　序

表土は、耕作土をほとんどそのまま利用した形で厚さ15cmを測る。その下に旧耕作土と思われる淡黄褐色土層（第２層）と暗黄褐色土層（第３層）が続き、第３層の下には同様な層が交互に25cm～30cm続いて、黒色土層（第９層）に至る。表土面から地山までは65cm程で、最深部で90cmを測る。

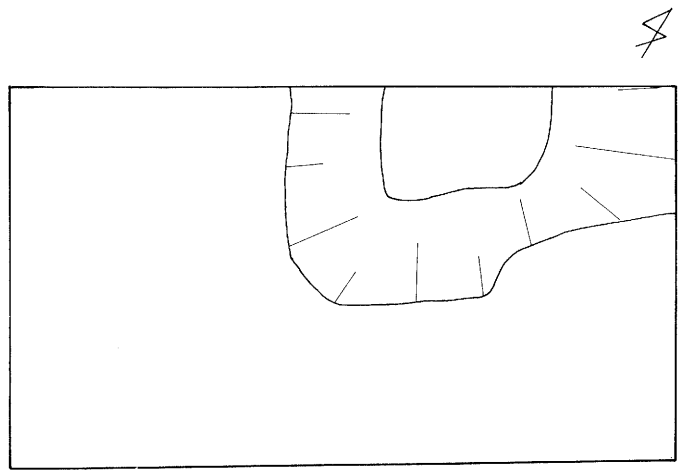
尚、トレンチ東側部分で流水による堆積とみられるシルト混じりの黄灰色砂質土(第7層）が確認された。



第17図　北側断面図

(3) 遺　構

調査面積の関係から、遺構としては明確なものが確認できず、トレンチ北側部分の最下層部で深さ30cm程度の土壙が検出されたのみである。

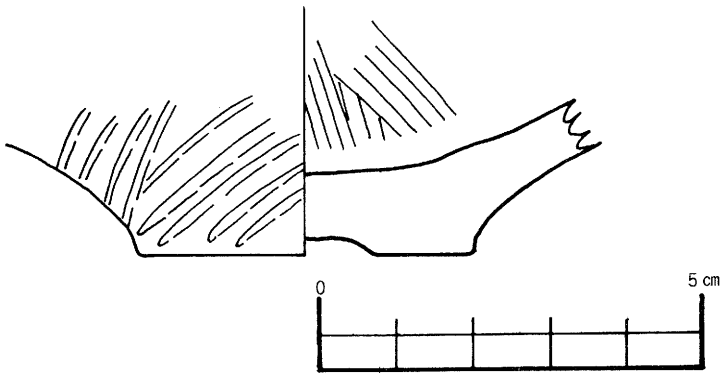


第18図　平面図

(4) 遺　物

表土層より陶器、土師器・須恵器片が混入して含まれる。黒色土層上面より多量の土器片が検出された。

1は、古式土師器の甕底部である。整形は、外面がタタキ・内面はハケ調整を行う。胎土は2～3㎜程度の砂粒を含み、色調は淡黄灰色で焼成は軟質である。



第19図　遺物実測図

(5) ま と め

調査地の面積が、わずかであったため正確な判断は出来ないが、調査区―②と同様、黒色土層の上面に同時期頃の土器が多量に出土していることから、同様な性格を持った遺構であったと推定できる。

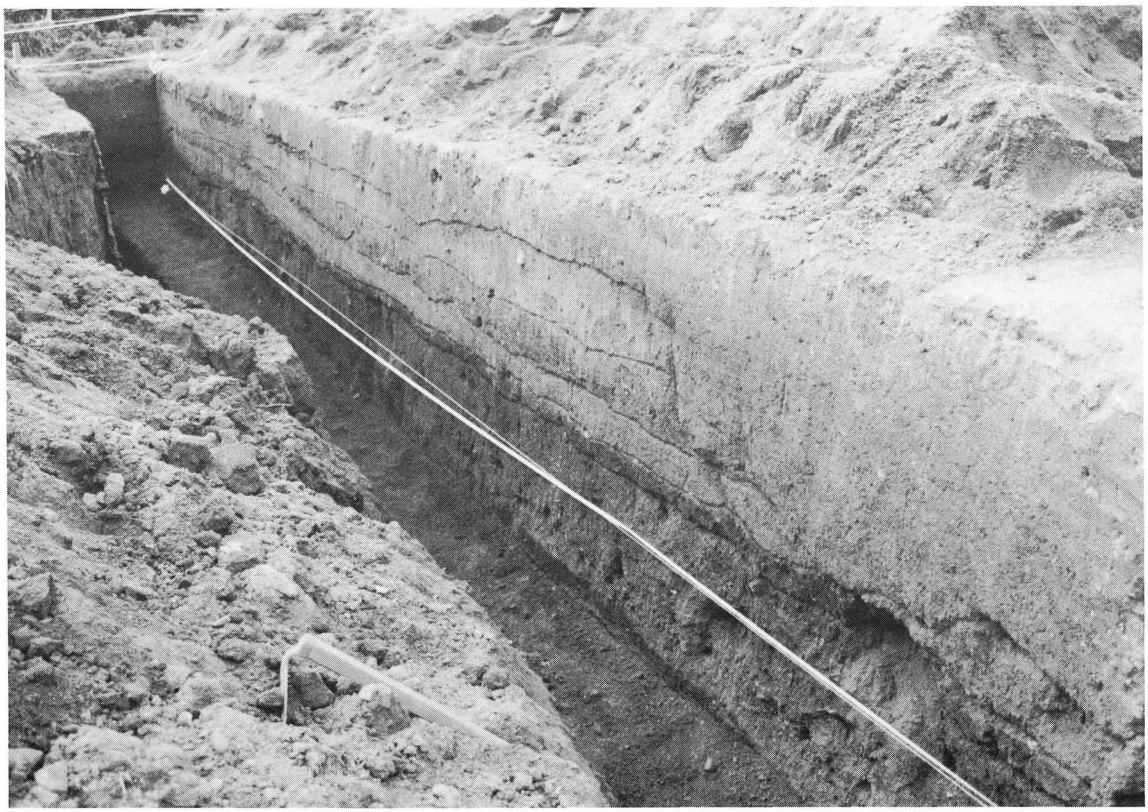
尚、同調査地より北へ下った駅前地域（61年度試掘）と比較して包含層が安定しているように思えた。

参　考　文　献

「石鏃」第9号・第11号・第13号　交野考古学会
「交野市史・復刻編」　交野市教育委員会
「大阪府史・第一巻」　大阪府史編集専門委員会
「神宮寺遺跡範囲確認調査概要」　1974.3　交野市教育委員会

図　　版

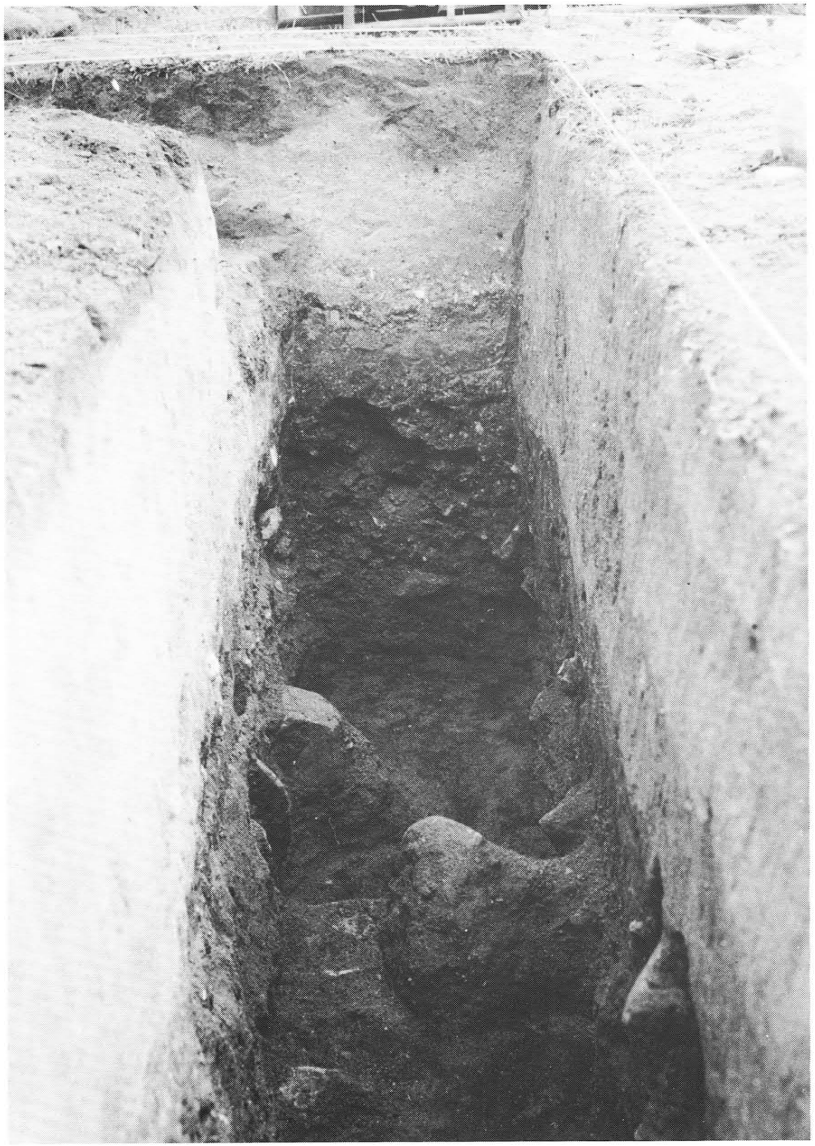
調　査　地　全　景　（神宮寺）



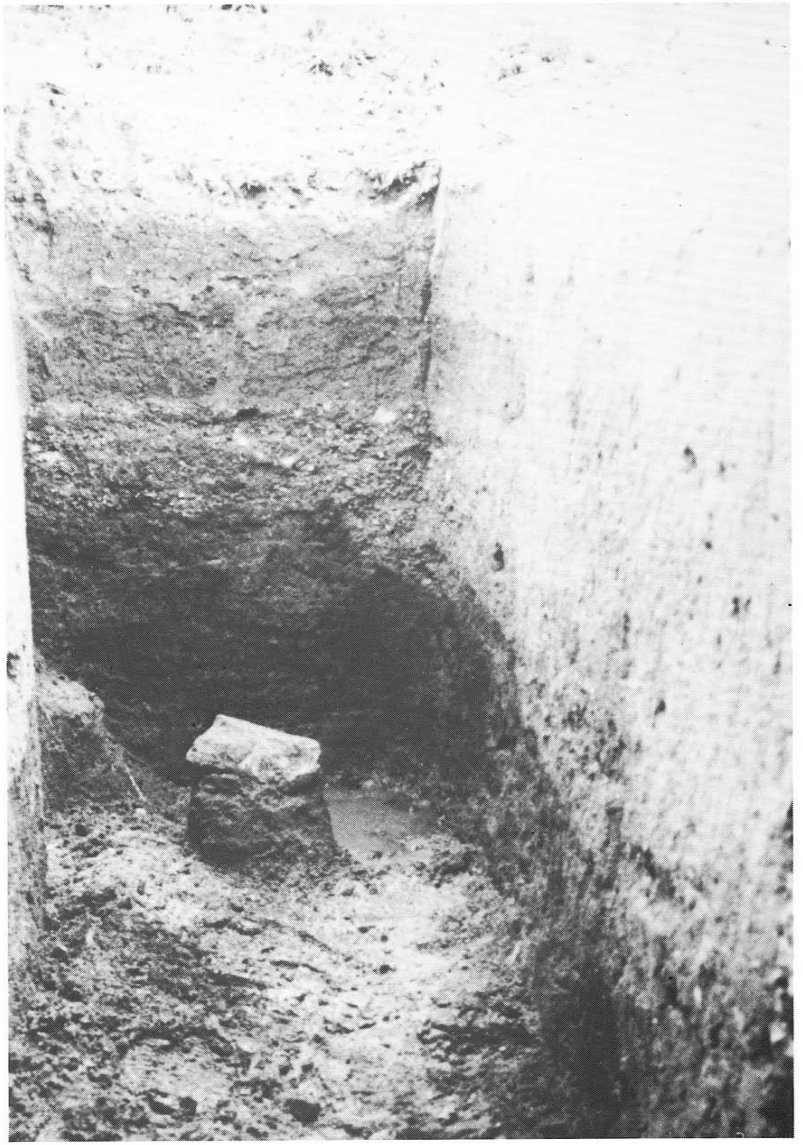
第１トレンチ西側断面　（神宮寺）

第1トレンチ北端部　〈神宮寺〉

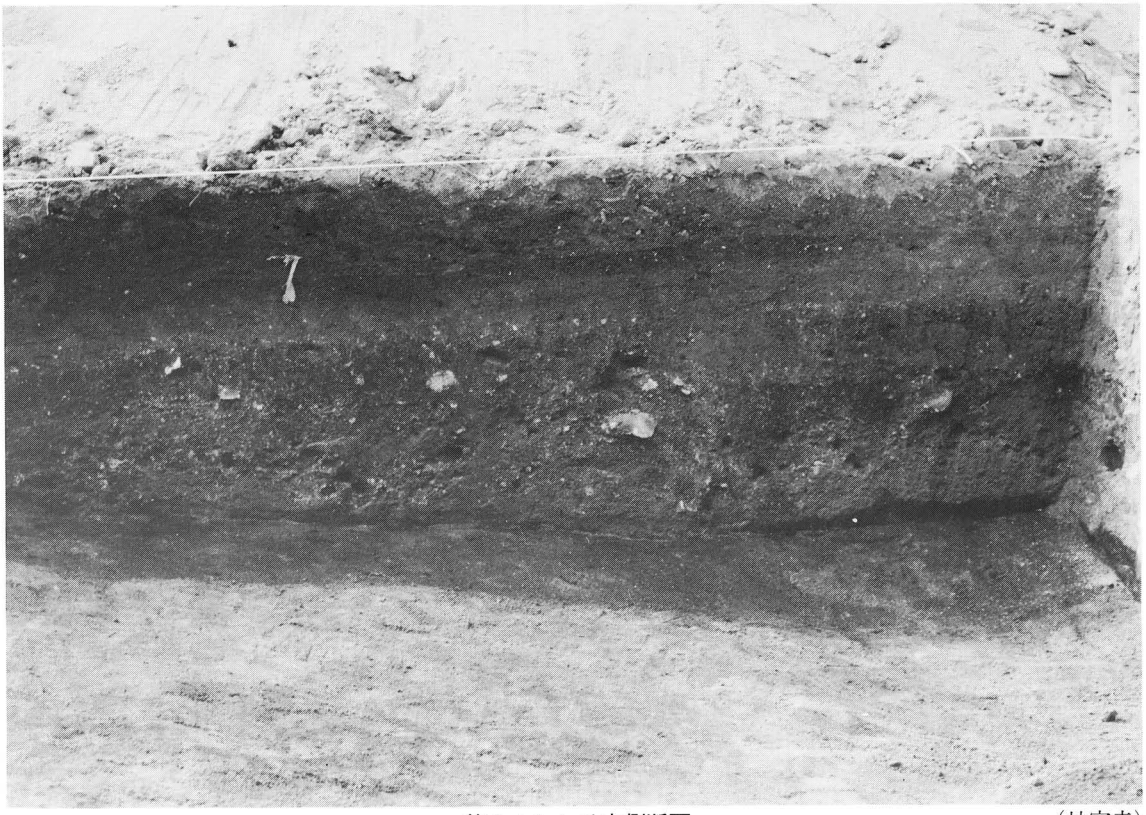
第3トレンチ南側断面　〈神宮寺〉



第２トレンチ西端部分　（神宮寺）

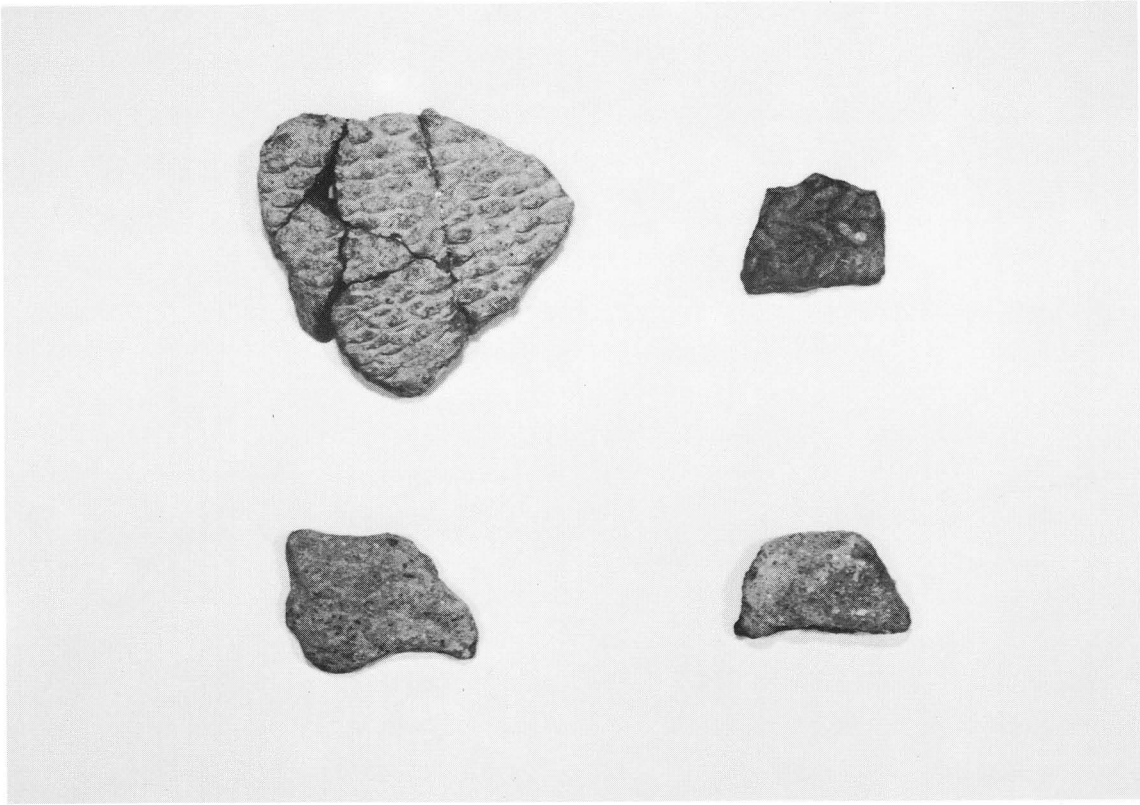


第２トレンチ東端部分　（神宮寺）



第3トレンチ南側断面　（神宮寺）

第3トレンチ南側断面　（神宮寺）



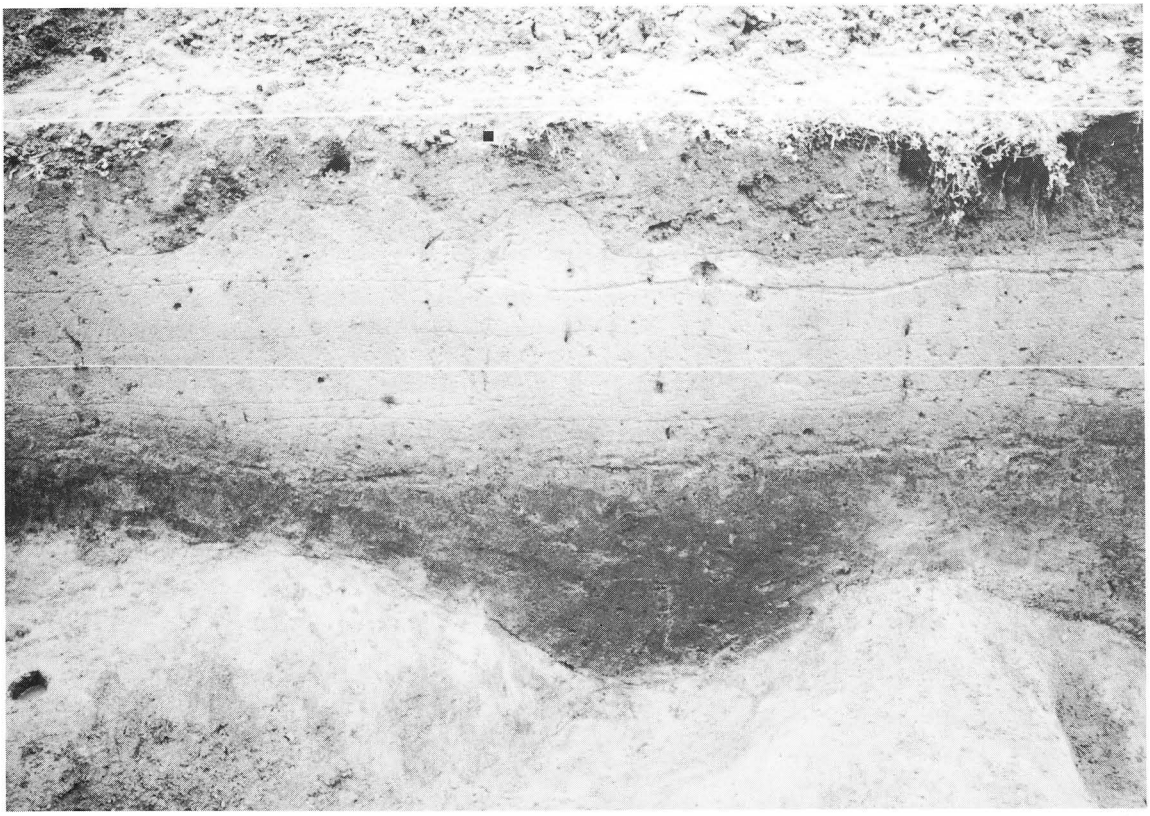
出 土 遺 物（縄文土器）　（神宮寺）

出 土 遺 物（縄文土器）　（神宮寺）

出　土　遺　物　（神宮寺）

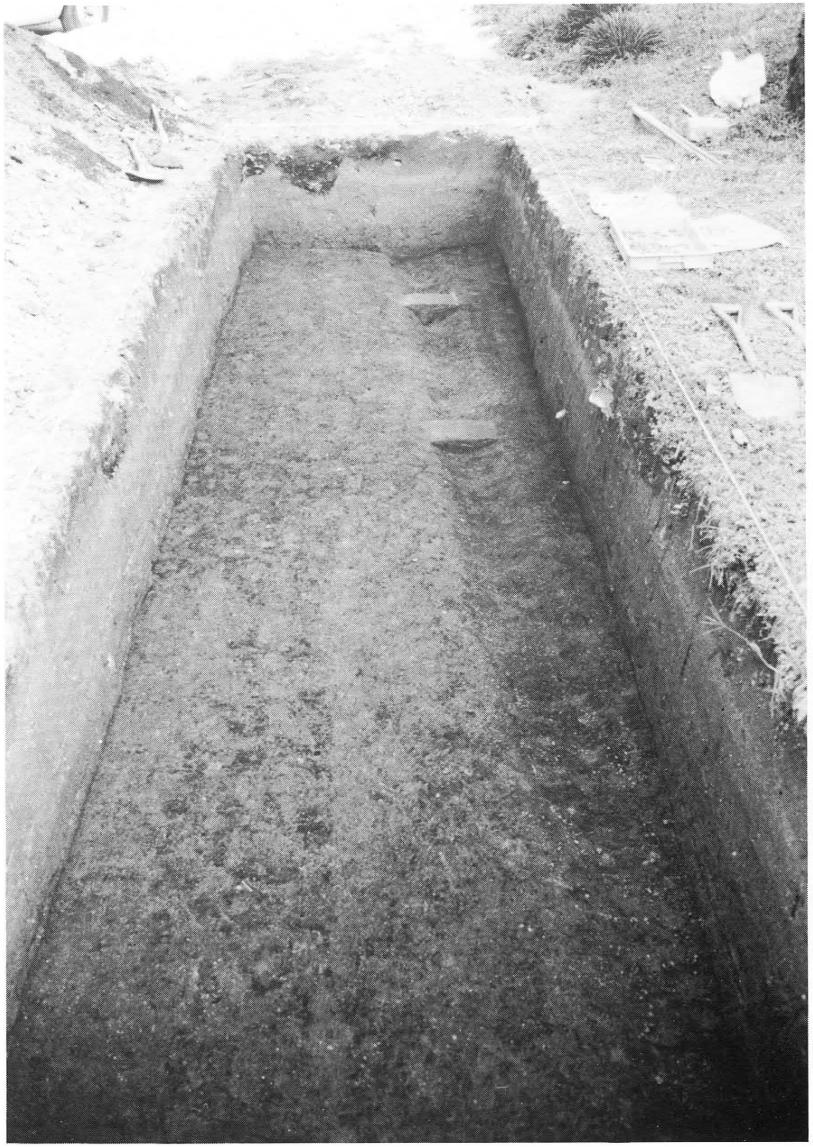
出　土　遺　物（上：縄文土器）　（神宮寺）

調　査　地　全　景　　（森調査区 ②）



北　側　断　面（溝部分）　　（森調査区 ②）

第12層下面全景　（森調査区 ②）



第 8 層下面全景（すき溝跡）　（森調査区 ②）

出　土　遺　物　（森調査区 ②）

第 9 層 下 面 全 景　（森調査区 ③）

土 壙 部 断 面　（森調査区 ③）

出 土 遺 物　（森調査区 ③）